

## その 56

### 万葉ファンタジア

#### 「今こそ、いや重けよごと」



万葉集から空想の翼を広げ、千数百年の時空を超えて新たな物語を紡ぐ「万葉ファンタジア」……「言霊<sup>ことだま</sup>の精霊」を語り手に、万葉ファンタジスタ大伴家持とその最後の歌「いや重けよごと」の物語が始まります。

人麻呂さまはこう詠われました。

「磯城島の 日本<sup>やまと</sup>の国は 言霊<sup>ことだま</sup>の 助くる国ぞ ま幸<sup>さき</sup>くありこそ」

(日本という国は、言霊が人を助けてくれる国、どうか幸多かれ) 柿本人麻呂 (巻 13・3254)

また憶良<sup>おぼる</sup>どのも、長歌の中でこう詠まれました。

「そらみつ 大和<sup>すめかみ</sup>の国は 皇神<sup>いつ</sup>の 厳<sup>さき</sup>しき国 言霊<sup>ことだま</sup>の 幸<sup>さき</sup>はふ国と 語り継ぎ 言ひ継<sup>ことだま</sup>がひけり」

(大和の国は皇祖神の厳かな国。言霊が幸いをもたらす国と語り継ぎ言ひ継がれて来た国ぞ)

山上憶良 (巻 5・894)

言霊とは、言の葉に宿る霊なる力。言の葉の「言」は「事」のことでもございます。発した言葉通りに「こと」が成る。私は言霊、その精霊にございます。家持さま他坂上郎女、大嬢<sup>おおいらつめ たまよぼい</sup>の魂呼ひをしたのはこの私。家持さまを現世<sup>うつしよ</sup>に呼び戻したのはこの私にございます。家持さまには是非現世に戻っていただきたかったです。万世に語り継ぐべき万世集……万葉集が、そして家持さまが今必要なのです。

「坂上の叔母さま、なにやら天上から声が降ってまいりましたが……私たちだけではなく、大嬢も現世に呼び戻されたとか?」、「はい、大嬢は家持さまを平城宮で待っておりますよ」、「そうですか。それは上々、早く会いたいものよ」、「それでは、ここ佐保川から平城宮に参内いたしましょう」。

和銅 3 (710) 年、藤原京から遷都した平城京は唐の長安を模倣して建造された都城にございます。中央北域に平城宮を置き東西・南北それぞれ 4 キロ余り、中央を南北に朱雀大路が走っております。

「叔母さま、大極殿 (上の写真) にございます。おお! 重厚な<sup>いらか</sup> 葺、朱塗りの柱は昔のままよ。そして、南門があり……その先に私ども大伴一族がお守りした大伴門、いわゆる朱雀門が見えます。城内の家々はなくなりましたが、まごうことなく平城京じゃ。小野老<sup>おのゆ</sup>どののあの歌、『あをによし 奈良の都は 咲く花の にほふがごとく 今盛りなり』を彷彿とさせます」、「誠にございます……ほら、家持さま、あそこに……」、「誠に誠に、大嬢のようじゃ」。



坂上大嬢

大伴家持

坂上郎女

言霊の精霊

「家持さま、それに、お母さま……お久しゅうございます」、「おお、なんとなんと、久方ぶりじゃ」、「お懐かしゅうございます。お変わりなくございましたか」、「おお、元気じゃった。皆が皆あの頃のまものようじゃ……」。

皆さまは常世、つまり常に夜の世界で眠り続けておられましたが、私ども精霊は、天上からこの世の移り変わりを否応なく眺めてまいりました。永い永い時の間に、私、言霊の精霊にとってさえ「言語を絶する」この世の出来事を目の当たりにしてまいりました。

「言語に絶する出来事？……どのような出来事にございますか？」

大きな「なる」や大津波、「なる」は今「地震」と呼ばれておりますが、わが国では万葉の時代から今まで繰り返されてまいりました。ごく最近も、かつての畿内や陸奥が大震災に襲われ大きな被害を蒙りました。そして、世界は今ロシアのウクライナへの侵攻による戦争に苦しみ、また、かつては鬼病かみのやまいと言われた疫病、新型コロナによるパンデミックが今も世界を覆っております。それにわが国では最近この平城宮近くで起こった手製銃による元首相暗殺事件とその後のおぞましいばかりの混迷など、いずれも言語を絶する出来事にございます。

「万葉の時代は数多の暗殺事件や謀反が相次ぎ、私も何回か巻き込まれましたが、今もなおそれが繰り返されていると申されるのか。それに、鬼病あみまかにございますか……万葉集には、遣新羅使が、『病あみまかに遇ひて死みまかりし時に作れる詞』と題詞した挽歌（作者未詳 巻 15・3688）を載せておきましたが」、「遣新羅使たちが平城京に持ち帰った鬼病あみまかが、時の朝廷や政権の中枢を襲い、藤原四兄弟の武智麻呂むちまろどのや房前ふささき、宇合うまかい、麻呂が相次いで亡くなりました。時代は大きく変わっても世に起きる悲劇は変わらないのですね」。

「ところで、万世に語り継ぐべき万世集……万葉集が必要なる声が聞こえたが、大嬢、そなたに託した万葉集はどうなりましたか？」、「藤原種継暗殺事件で没収された万葉集は、桓武天皇の御代は、罪人の書として朝廷の官庫の奥深く閉じ込められ、以後、公けになることはありませんでした」、「罪人の書……」。

「それから 20 年余り後、自らの死を悟った桓武天皇は、種継暗殺事件に連座したすべての人々の罪を解いたのです。この恩赦の日桓武天皇は崩御されました。」



そして、安<sup>あて</sup>殿皇太子が即位し、平<sup>へい</sup>城<sup>げい</sup>天皇となられましたが、新天皇は、家持さまの御魂、怨霊を鎮めるため官庫に眠っていた万葉集を持って来るよう臣下に命じたのです。天皇が初めて目にしたその歌集は、全 20 巻、4500 首を超える膨大なものでした。その歌集の最後を飾る 1 首が、家持さまが因幡で迎えた最初の正月に詠んだ歌『いや重けよごと』、その歌だったのです。この最後の歌を詠み終えた平城天皇は、高らかに詔を発せられました」。

「ここに、万葉集を撰し、万世に相伝えるべし」

天上から再び言霊の精霊の声が響いてきた。

ホドロ、ホドロ、ホドロ……天上からたくさんの歌や言の葉が現世に降り注いできます。罪人の歌集として、永く閉じ込められていた万葉集が陽の下に解き放たれたのです。万葉集が散逸されることなく生き延びることができたのは、皮肉にも罪人の歌集として、永く封印されていたおかげなのかも知れません。それが奇跡のごとく甦り、この国の宝となったのでございます。

「国の宝とは、ありがたきこと。何より幸せにございます」。

善きことばかりではございませんでした。言語を絶する出来事の 1 つに、戦争と申し上げました。万葉の時代から、国内での争いだけではなく、海外との戦争も繰り返してきました。天智 2（663）年の白村江の戦いは、唐・新羅軍に攻略された百済の救援のためにわが国も軍を進めましたが大敗し、百済は滅亡。日本は朝鮮半島進出を断念するのですが、それから千数百年も後に、わが国は朝鮮を併合し、満州や東アジアに進出する大東亜戦争から太平洋戦争に突入することになるのです。



言霊の精霊：玉川奈々福

そのための戦意高揚、軍国主義の道具として、万葉集は利用されることになります。家持さまが詠った長歌の一部が、大伴家持作詞の軍歌として、戦意高揚のために使われておりました。

「万葉集が戦意高揚や軍国主義の道具として利用された？それも私の作詞として軍歌に使われた？誠にございますか？それは、どの歌にございましょうか？」。

家持さまが、東大寺の大仏に塗布する金が出土した時に詠んだ歌「陸奥国より金<sup>くがね</sup>の出せ詔書<sup>ことば</sup>を賀<sup>が</sup>ぐ調」（巻 18・4094）にございます。この長歌の一部から、軍歌「海ゆかば」が作られました。

「海行かば 水漬<sup>みず</sup>く屍<sup>かばね</sup> 山行かば 草生<sup>くさむ</sup>す屍<sup>かばね</sup>

大君の 辺<sup>へ</sup>にこそ死なぬ かへり見はせじ」



大伴家持：和泉元彌

(海に行けば、水に漬かった屍となり、山を行けば、草生す屍となって、大君のお足もとにこそ死のう。後ろを振り向くことはせずに)

この軍歌は、国民精神総動員をテーマに、放送局が作曲家の信時潔に委嘱、作曲したもので、準国歌と言われるほど、戦時中よく歌われました。戦いに赴く兵士の決意を詠った歌として、大本営発表や出征兵士を送る時、また玉砕を伝える時などによく使われたのです。

「確かにこの長歌は私が作った歌で間違いありません。532 文字という、私の歌の中でも一番長い歌の 1 つですが、軍歌として使われたのは、その 31 文字というほんの一部。それも、その部分は私が作ったのではないのです。これは、陸奥で金が発掘されたことを寿ぐ天皇の詔の中で述べられた『言立て』でした。それを私の賀歌に付したのです。言立てとは、大君をお守りするもののふの家柄、大伴や佐伯に代々伝えられた家訓。確かに大伴一族の氏上として、この言立てを守り大君にお仕えてまいりましたが、民に向けた言立てではありません。それを、民を戦場に送り出す軍歌に仕立てたのですか？……あつてはならぬことにございます」。

お国が戦意高揚に利用した歌がもう 1 つあります。防人の歌です。万葉集の防人の歌から 1 首を選び、若者を戦場に駆り立てる道具として使ったのです。

「防人の歌を戦意高揚のために利用した？ 防人の歌は、東国の防人をまとめる部領使<sup>ことりづかひ</sup>たちに、防人たちの歌を集めさせたもので、その中から確か 84 首を万葉集に載せました。防人の歌のほとんどが、家族との辛く悲しい別れと残してきた者たちへの切ない思いを詠った歌ばかりなのです。なぜそんな歌を戦意高揚のために使うのですか？ 一体お国はどの歌を使ったのですか？」

どの歌か？ はい、「醜の御楯」の歌にございます。

「そうですね。私もその歌かとは思いましたが、やはり『醜の御楯』の歌にございましたか。このような歌でした」

「今日よりは 返り見なくて 大君の 醜<sup>しこ</sup>の御楯と 出で立つ吾は」 (巻 20-4373)

(今日からは、自分のことは省みず、天皇の楯となって出征し、命がけで敵と戦うのだ)

この歌が、太平洋戦争の時代、万葉集の中で最高傑作の 1 つと称され、戦意高揚に使われたのです。

「確かにこの『醜の御楯』の歌は勇ましき歌のように聞こえますが、そうではないのです。防人を束ねる長、火長<sup>ちよつ</sup>である者が詠んだ歌で、愛しい妻や子、父母との悲しい別れ、その辛い思いは他の防人たちと同じでも、火長としてはそんな思いを振り払い、健気にも、『今日よりは』と、自らを奮い立たせて出立の指揮をとらねばならなかったのです。このように強がって詠わねばならぬ切ない思い……この防人の切ない思いが胸に迫ってくるので、万葉集に載せたのです。そんな歌を若者を戦場に駆り立てる道具として、お国は利用したと言うのですか？……痛恨の極みとしか言いようがありません」。

「醜の御楯」を日本軍人の精神と教え込まれ、「海ゆかば」の歌で戦場に送り出されたのは若き学徒たちだけではありませんでした。太平洋戦争末期になると、米軍の沖縄上陸を前に、日本軍の地区隊長は、住民に対し布告を発します。「天皇の醜の御楯となり、一死以てわが郷土を守ることをここに宣誓せよ。沖縄人諸子！ 醜敵米軍を粉碎し、殲滅せよ」。

こうして、多くのひめゆりの乙女たちも、その若き命を散らしていったのでございます。



坂上大嬢：  
下田 麻美



坂上郎女：  
紺野美沙子

家持の「痛恨の極み」という言葉を聞いて、その妻大嬢が、そして坂上郎女が言葉を継いだ。

「家持さま、あなたさまは防人を検校する兵部少輔になられた時、常々税を免除されることもなく、遙か東国の農民たちを防人として徴用するのはあまりに気の毒じゃ、と申されておりまして。集められた防人たちの歌を読まれて、家持さま自ら防人の悲別の情を陳べたる歌など 20 首以上の歌を作られ、それを朝廷に献上されましたが、そのおかげで、その後東国からの徴用はなくなったのではないのですか？いえ、むしろ、そんな苛酷な制度をやめさせるために防人の歌を集め、家持さまも防人たちの悲別の歌を詠まれたのではありませんか？」

「そして、家持さまが兵部大輔に昇進された後、東国からの防人は廃止され、それ以降九州から徴兵されることになったというのではないですか……言霊とは、言の葉の霊なる力……そう、歌の力が東国の防人たちを救ったのです。家持さまに歌をお教えた甲斐がありました。ちなみに、万葉の時代から今に至るまで、家持さまほどに兵たちを思いやるもの<sup>の</sup>ふの指揮官はいたでしょうか？言霊の精霊さま、いかがにございますか？」

はい、「言霊」についてはその通り、歌の力が人の心を動かしたのは確かでしょう。そして、家持さまのように大君をお守りする家柄に生まれ、最後に持節征東将軍として亡くなるまで国にお仕えたもの<sup>の</sup>ふでありながら、歌を愛し、女を愛し、兵を愛し思いやる「もの<sup>の</sup>ふ」……そう、「愛のもの<sup>の</sup>ふ」……私の知るかぎり、「愛のもの<sup>の</sup>ふ」と呼ばれるに最もふさわしいお方と思われます。

「愛のもの<sup>の</sup>ふ？私が、愛のもの<sup>の</sup>ふ…？若者たちを戦場に送った歌を編んだ私が…愛のもの<sup>の</sup>ふ？」

はい、家持様は、まごうことなき愛のもの<sup>の</sup>ふ。「海行かば」によって戦場に送り込まれた多くの若者たちは、その背囊に、愛の歌集「万葉集」を忍び込ませて出征していきました。万葉集は、地獄のような戦場で、若者たちの心の支えとなったのです。戦場葉書に、万葉集の恋歌の歌番号を書いて内地の恋人に思いを伝えた若者たちもいました。

「いや、それなら私ではなく、彼らこそ、『愛のもの<sup>の</sup>ふ』と呼ばれるにふさわしい……」。

罪人の書「万葉集」が、家持の恩赦により晴れて公けになった日の約 50 年前の 759 年、今から 1260 年余り前の正月の宴の席で、万葉集の最後にして家持の最後の歌「いや重けよごと」が詠まれました。

それを、現世に甦らせるとしたら、果たしてどのような宴になるのでしょうか。



天平宝字 3 年の春正月 1 日、因幡守だった大伴家持が因幡の国庁で国司や郡の役人らを饗応した宴が、家持の脳裏に鮮やかに浮かび上がってきた。天からはしきりに雪が舞い降りてきた。

「あの日は、20 年ぶりに元旦と立春が重なるめでたき日でした」

「さらには、ホドロ、ホドロに雪も舞い降りてまいりました」

「元旦の雪は、豊年を告げる吉兆と言います。世の中混沌として世情は騒然、心穏やかならぬ時に、3 つもの良きことが重なった日でした」。

家持の言葉を受けて、言霊の精霊が、天上から言の葉を合わせる。

大和の国は、言霊の幸はふ国。言霊の幸はふ国ぞ、ま幸くありこそ。言霊とは言の葉に宿る霊力のこと。その言の葉によって、歓びがもたらされ、コト（言、事）が成り、願いがかなう。

時にその逆もまた真なり。言霊は、国を戦争の道に誘い、その言の葉により、人は争い、人を殺める。

憶良どのは、「言霊で幸いをもたらす国になれ」と詠った。人麻呂さまは、「言霊が助けてくれる国、幸多かれ」と願った。

そして、家持さまの万世に語り伝える万葉集、その最後を飾る歌、ご自身最後の絶唱は、万世の人々に贈る祈りの言霊……

<sup>あらた</sup>  
「新しき 年の初めの 初春の 今日降る雪の いや重けよごと」

（新しい年の初めの正月の今日降る雪のようにもっと積れ良いことよ）

いや重けよごと、ますます重なれ良きことよ。日本の国に、<sup>やまと</sup>いや重けよごと。このお国が、ふたたび戦の道をたどることなかれ。このお国の若者を、ふたたび醜の御楯とすることなかれ。ふたたび戦の道具にすることなきよう、万世に語り継ぐべし、万葉集。万世に語り継ぐべし、いや重けよごと……

「この『いや重けよごと』の歌を現世によみがえらせるとしたら……『<sup>あらた</sup>新しき<sup>とし</sup>年』の 1 字だけ変えて、この歌を詠み替えようぞ。『年』を『時代』と変えて『とき』と詠むなり」。

シタ、シタ、シタ……コウ、コウ、コウ……ホドロ、ホドロ、ホドロ  
「初春令月、気淑風和」、時まさに初春の良き月にして、空  
気は澄んで、風は柔らか……令和よ。

ホドロ、ホドロ、ホドロ、雪が降ってくる。天から歌が舞い降りて  
くる。私は新たに始まった令和の時代に向け、令和の時に向け  
て、世の人々に伝えたい。これから始まる新しい時代、新しい  
時のために。

あたら とき  
「新しき 時代の初めの 初春の

今日降る雪の いや重けよごと」



「世界に広がる鬼病かみやまいが一刻も早く収まり、穏やかな暮らしに戻りますように……」

「世界で繰り広げられている悲惨な戦争が、一時も早く終わいっときり、平和な暮らしに戻りますように……」

「巨大な『なみ』で多くの人命が失われるようなことがなきように……」

「万葉の時代から変わることなく今も、人が人を欺き、人が人を殺め、互いに殺しあう……かくのごとき言語  
を絶する出来事がこの世の中からなくなることを祈って……」

あたら とき  
「新しき 時代の初めの 初春の 今日降る雪の いや重けよごと」

万葉の古から今へ向けた家持のメッセージである。「万葉集ナウ」、今こそ万葉集……。

世界のコロナ禍が収まり、世界から戦争もなくなり、現代に甦った宴は新しい時代を祝い、世界の人々に  
「いや重けよごと」、幸多かれと祈って踊る因幡の国の傘踊りが始まる。

その祈りが叶うことを願って切なるものがある。



因幡の傘踊り保存会美敷支部の皆さん

「万葉～古から今へ」（ニックネーム「万葉集ナウ」） 完